

25 山崎千三郎と製茶産業

筆 者 岡本 春一

「松ヶ岡」である山崎家の繁栄を見るに、第一期は江戸時代の太田藩第2代目太田資愛が江戸幕府老中に抜擢され、「寛政の改革」の推進者として全国各藩の先頭に立ち、「掛川藩校」を全国に先駆けて開校させ、「掛川誌稿」の編纂も全国のトップグループを切って編纂した事。また「偕楽園」と云う娯楽施設を設けて、掛川藩三大文化の華を咲かせた事です。第二期は江戸幕府の崩壊によって大政奉還の大混乱の中で、新旧に依る戊辰戦争が始まりようやく決着が付いた。そして明治維新となり新政府は如何なる方向に舵を取り進むべきか伎路に立たされます。

第一期は第4代目山崎万右衛門晨園が固く家の方針を決めた、「家訓」に依り迷う事無く藩と運命を共にして、金子藩御用達としての道を選んだ事で成功裡に終わります。第二期は8代目山崎千三郎が先祖の残した遺産である大資金(明治時代県下直接国税納税者第2位)を如何に投資すべきかに掛かっていた。

明治新政府は世界の先進国に遅れを取らない様にと、殖産興業を打ち出し近代産業の発展を期します。これに対して山崎千三郎の発想は、掛川宿発展の基盤は流通の便を図る為に、まず道路整備の重要性考え森街道の自費改修を進めた。同時に新政府の殖産興業とどう対応するかを考察します。

当地域としては幸いにも江戸時代末期より成長をし続けて来た、吉岡原・原谷・東山地域は茶の生産にも適しており増産も見込まれる事から、ただ国内販売に頼るだけではなく、180度方向転換をして海外貿易を行ない高い利益を上げれば、農家も大いに潤うと考え実践して行きます。山崎家の裕福な資金の投入をまず製茶の海外輸出に目を向け全力投球する事にします。そして遠州一円の指導者として頭角を現わして行きます。

振返れば江戸時代末期の安政元年(1854)日米通商条約が結ばれ、不平等ではあるが海外貿易が開始されて順次発展して行きます。茶の輸出は文久2年(1862)大谷嘉兵衛に依って横浜より茶の貿易が開始されますが、粗悪茶が多く再生の技術を持たなかった日本の商人は、外国のバイヤーに安く買い叩かれて日本人の利益にはならなかった。

前述の通りこれに目を付けた山崎千三郎は明治5年(1872)横浜に茶の再生工場を作り、製品の精製と品質の向上を図り、横浜港からの海外輸出に成功します。(政府が茶の輸出を決めたのは3年後である。)これに依って、遠州地方各地の製茶の輸出が盛んになり、軌道に乗って生産も一躍進展して行きます。

以上郡茶業史を参照して見るに、明治8年(1875)遠州一円の中より掛川組は

「今度製茶所を置き海外各国へ、遠州産名を以って引合い出来候、御趣意に付き製造する。」

旨、上垂木村を始め25ヶ村戸長宛良質茶を、検査人を立て製造する申合せをし、悪質の茶の統制を強めて良質茶の出荷計画を立てます。各村々はこれに依って署名連印をして生産に乗り出します。

当時の農村の収入高を見ると明治7年久居島村の「産物調査書」では、米243円、大麦

166 円、茶 1,083 円となっており、茶に依る収入が格段に大きかった事が伺えます。明治 17 年(1884)には掛川茶業組合が創立され、組合員は佐野郡は 2,812 名(45%)、城東郡 3,196 名(28%)計 6,008 名を擁する大規模集団に成長して行きます。

横浜港への輸送は相良港から帆船であったから、風任せであり悪天候に見舞われれば避難を余儀なくされていた。明治 13 年(1880)従来帆船で横浜港に輸送していたが、前述の如く風雨天候に左右され延着で期を失う事から、輸送品を取扱う相良港では地元の丸尾文六が英国より蒸気船を購入し「鴻益丸運輸会社」の創立の報を知って、株主丸尾文六で掛川からは旧御用達仲間の山崎千三郎・鈴木九一郎・松本文治等が筆頭株主となって輸送会社を作る事になります。(会社は明治 22 年東海道鉄道の開通に依って解散します。)

こうした輸送費に莫大な経費を費やす事から、山崎千三郎は明治 14 年(1881)磐田より榛原に到る遠州一円の業者に呼び掛けて、「製茶直輸会社」を創設して各地に 7 分所を設けます。そして更に静岡に資本金 50 万円の茶再生工場を建設して横浜から工場を移し、清水港から海外輸出する事に踏み切りました。これに依って掛川地域からは製茶 8,000 櫃、金谷地域は 5,000 櫃、島田地域は 2,000 櫃が集荷され輸出する事になりました。牧之原茶園の拡大進展は有ったとはいえ、この現状を見て分かる通り掛川地域の輸出額が格段に大きかった事は、山崎千三郎の指導力と結束の強さを示すものと思います。このようにして掛川地域の輸出茶は盛況を示し成功裡に事業は進展して行きます。(その他の山崎千三郎略歴は割愛します。)

最後に山崎千三郎の功績を総括して見るに、現在掛川地域が毎年全国製茶品評会で農林大臣賞を始め地域賞を常に受章しています。この事は江戸末期より茶に適した土地と共に、製茶技術を磨き努力を欲しななかった地域住民の努力と、明治時代以来地域産業の将来を見越して、家運を掛けて献身的努力をした、投資家である山崎千三郎の功績は偉大であります。

しかしながら掛川市史を始め一般市民も、明治初期の製茶産業の実態を案外知らないのは、山崎家の資料が未開発である事に基因しているものと思われます。毎年製茶期の初めには伝説で茶祖と云われる駿河国は聖一国師が、遠江国は栄西禅師が丁重に祀られて祈念しているが、実質遠州地方明治期の茶の発展に最大の努力を捧げた、山崎千三郎等の業績が何等話題にさえ乗らないのは如何なものか。今後は末端の資料だけでなく、本来の本流に添った遠江地方の製茶産業の流れに乗せた史実を発掘したいものです。

余話

現在茶の生産地として牧之原大茶園があります。この開拓の大半は失業した武士と川越人夫の開発したものであります。江戸幕府の滅亡に依って徳川慶喜が大政奉還を行ない、水戸藩お預けの身となって、護衛の任に当たった隊長中条景昭等が慶応 3 年 10 月(1867)親衛隊として徳川慶喜の静岡移転に同行します。そして新番組と改組して隊員は、副隊長大草高重と共に久能山東照宮で待機していたが、その任務も終わり協議の末に武士を捨てて帰農する事になります。

克って大草高重は「宇治茶御茶壺道中採茶使」の任に当たった経緯もあって、安政 4 年(1857)には隊長も勤めています。こうした大草高重の茶の知識と牧之原台地が茶の生産地として適合している事を認識した隊員 300 余名が、入植したと県茶業史は伝えている。武士は

明治 2 年(1869)7 月初倉・金谷側から入植を試みています。

一方明治 3 年(1870)「大井川川越制度廃止」によって、1,200 人の川越人夫は青天の霹靂でその日から生活に困り放心状態に陥ります。これを救ったのが「金谷の三蔵」と云われた川越人夫頭の仲田源蔵、これに賛同した杉本権蔵、金谷宿を総括していた名主の河村玲蔵の三蔵であると云われています。

特に川越人夫頭の仲田源蔵は途方に暮れる川越人夫の救出が最優先だと、「大井川渡船計画」を立て川越人夫に任せて欲しいと島田郡役所へ嘆願書を提出します。しかし末端役人では力無く却下されます。島田郡役所は暴動を恐れ仲田源蔵を川方監督に任命し、渡船へ役員共に 20 名程採用に留まった。これでは全く意に反した回答で、混乱する川越人夫の救済にはならぬと、仲田源蔵が意とする所では無いと監督を固く断った。

救済の先頭に立った仲田源蔵は万策を試み、川越人夫救済策として地方役人では問題の解決にはならぬと直訴を試みた。直訴は役所を通さない越訴である事から身命を賭し死刑を覚悟の上で、自ら鬣を切り遺髪として家族に托した。そして自家の田畑を売り払い 70 両、借財 30 両の計 100 両を懐にして、一刻の猶予も無いと早駕籠を用意して上京し民部省へ直訴します。

仲田家の史料で見ると箱根の山を駆け抜けようと、仲田源蔵等一行は一目散に早駕籠で駆け上がった。一方大迫県令は伸びやかに赴任する静岡は如何なる土地かと下って来たが途中で、仲田源蔵の駕籠に振れたか否や問題を起こした。のみならず大迫県令が唾を吐いたとひと悶着が起こった。怒り心頭に達した仲田源蔵は俺は「川越制度廃止に依り、人夫 1200 人救済の直訴の途中」である事を告げた。漸く大迫県令も只ならぬ事態を承知して、もし源蔵が死刑になった場合俺が骨を拾おう。そして事業の面倒は俺が見ようと。急いで参れ、と別れを告げたというエピソードが残っている。

この直訴に依って明治 4 年漸く川越人夫救済金として 1990 両が下賜された。(金谷宿 1000 両・内 75 両は日坂御林。島田宿 990 両)それと同時に萩間地域での開拓地 204 町 7 反歩が払下げになります。仲田源蔵は希望する者を引連れて入植し、1 番組～3 番組を組織して開拓はようやく始まります。

明治になっても武士は開拓に腰がふらつくと刀を差していた。と云う事は文句があるならばぶった斬るぞと云う事である。明治 4 年「散髪廃刀令」を出したが隊長中条景昭を始め髪を切らず、廃刀する者は居なかった。折角川越人夫が開拓した茶畑・野菜畑へ武士は馬で乗り入れて荒し廻って帰る事がしばしばあった。これを見た人夫頭の仲田源蔵は腸の煮えくり返る断腸の思いで、神も仏も無いものかと憤った。そして遂に幕政時代武士が最も嫌っていた「耶蘇教」(誰もが求めれば上下の隔たり無く幸福を与えてくれると云う。)に、同志と共に入信し、ペテロ源蔵として大反発をした。

川越人夫の開拓は堅実に進行したが、惜しむらくは仲田源蔵は明治 24 年(1891)脳溢血で倒れ亡くなります。葬儀は金谷宿天王町の自宅で行ない、棺は顔を花輪で飾り開拓の恩人であると遺体は銘茶で敷き詰められていた。町民挙げての葬儀となった。金谷宿の自宅より萩間村の墓地まで見送りの人は絶えなかったと云う。(萩間の辻にペテロ源蔵の墓がある。)

牧之原の最初の茶の収穫は明治 7 年(1874)で武州狭山の製茶技術を採り入れ順次拡大し

ていった。入植には相当の困難があつて離農する者も多かった為か、武士は明治 10 年初倉に東照宮の分社を建て、家康の恩顧を忘れるなと引き留めた。川越人夫はヤソ教に入信する事でいずれも神頼みをしたと思われます。

この様に牧之原開拓に身命を賭した仲田源蔵、この事業に大地主として参画した丸尾文六、武士として開拓に入った大草高重、更に海外貿易で新しい道を開き遠州地方発展の基礎を築いた掛川宿の山崎千三郎の四氏は、何れも明治 20 年代にこの世を去っています。

思い出として金谷中学校時代には、入植副隊長大草高重の孫に当たる大草桂三先生には土塁のある屋敷に招かれ、先祖の入植話や徳川家から戴いた銘刀を見せて頂いた。また仲田源蔵の曾孫仲田英機は担任として指導に当たり、藤枝東高から東京大学への道を選んだ事が思い出されます。